

研究結果

本研究では、韓・日母語話者の修復行動の実態を明らかにするため、修復行動の生起状況における認識方式と表出方式を調べた。ここでは、アンケート調査による認識方式を中心にまとめる。

本稿でいう「修復行動」とは、誰かの危害行為によって対人関係の不均衡状態が生じた際、対人関係の損失を最小限に留めたり、自分への否定的な評価を軽減するために行われる一連を言語行動を指す。本稿では、韓・日の母語話者がそれぞれの状況において修復行動の必要性をどのように判断したかを、評価尺度アンケートで調べた。談話完成タスクで用いた8場面(不満を言っている相手に主な責任がある4場面、第三者や外的要因に主な責任がある4場面)において、どのように状況を判断したか、五つの尺度(1:全然そう思わない、2:少しそう思う、3:どちらでもない、4:少しそう思う、5:非常にそう思う)のうち一つを選ぶものである。なお、質問項目は次の三点である。(1)この事態が相手にとって腹立たしいことだと思うか。(2)この事態が起こったことについて自分に責任があると思うか。(3)この事態で相手をなだめた方がいいと思うか。

分析の結果、韓・日母語話者ともに、主な責任が相手にある場合と第三者や外的要因にある場合、両方において、自分に責任があると感じる程度に比べ、相手をなだめて関係修復を図った方がいいと思う程度が高いことが分かった。つまり、韓・日母語話者ともに自分の責任ではなく相手や第三者・外的要因によって対人関係の不均衡状態が生じた場合においても、その状況を改善するため自分からの修復が必要だと感じているのである。しかし、責任所在による平均値には、韓・日間の相違が見られた。、韓国人の方が日本人より責任所在に敏感であることが分かった。

今までの異文化間語用論(cross-cultural pragmatic research)は語用言語学的慣習(pragmalinguistic conventions)の調査に集中してきたが、最近では状況判断規範(社会語用的慣習:sociopragmatic conventions)の調査に目を向けるようになった。このような傾向は、実際の言語運用である語用言語学的慣習を正しくかつ深く理解するためには、まずその根底を成す社会構成員の規範たる社会語用論的慣習を知っておく必要があるという認識に起因する。今回の調査で明らかになった修復行動の必要性に対する認識方式の相違は、必然的に修復行動の表出方式に反映されよう。そういった意味で本稿は、今尚進行中である修復行動の表出方式の記述及び分析に先立つべき課題であったと言える。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等) :

論文 (予定) (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等) :

題名:異文化間語用論における修復行動—韓・日の母語話者を対象に—
発表者名:金志宣
論文掲載誌:日本語文学
掲載時期:2009年3月ごろの予定

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等) :

* 上述した研究結果は研究全体の一部(分析1. 認識方式)であり、分析2(表出方式)の方は只今進行中です。今後、両方をまとめた形で、論文として公表する予定にしております。